

## 横浜現代史人物伝③ 又木 誠八郎



又木誠八郎

又木誠八郎は、一九二四(大正一三)年三月二五日、鹿児島県に生まれた。地元の志布志中学校(現在の志布志高等学校)を卒業後、日本体育専門学校(現在の日本体育大学)に学んだ。その後、一九四三(昭和一八)年三月神奈川県立横浜第二中学校(現在の横浜翠嵐高校)を振り出しに、新城高校、横浜平沼高校、高浜高校(平塚市)、海老名高校などで、四〇年以上にわたって教鞭をとった。その傍ら横浜バレーボール協会、神奈川県バレーボール協会をはじめ、各種団体の役員をつとめるなど、戦後のバレーボールの普及と技術向上に力を尽くした人物である。

### 横浜バレーボール協会の創立

横浜・神奈川における戦後のバレーボールは、一九四六(昭和二一)年四月平楽国民学校で開かれたYMC A主

催の大会に始まる。未だ空襲の爪痕が残り、市街地の中枢を接収されているなかで、三四チームが参加した。又木は、旧知の仲間との再会に感激する一方、「学校の白っぽい汚れた感じの壁」が強く印象に残ったという。この大会と前後して神奈川県バレーボール協会が再発足し、又木は常任理事となった。これより遅れること約一年、今度は横浜市バレーボール大会が横浜二中で開催され、約五〇チームの参加を得た。当時、同校で体育教師をつとめていた又木も準備に勤しんだ。

横浜二中(現翠嵐高)の校庭に生徒の手によって薄暮の中で、しつらえた砂利だらけのコート? 四面、四寸角材のポール: 勿論フェンス等あろう筈はなく、レシーブに失敗すればボールは校庭を転々、下手すると崖下に落ちる。必死にボールを追う。空き腹にズシリと来る。まことに鍛練的ハードなもので、ヨーチンと称する擦り傷用の薬を必需品とした。今顧みれば素朴そのものの賑やかな楽しい大会であった(『横浜バレーボール協会五十年史』三六頁)。

この大会を受けて、翌年(一九四八年)四月横浜バレーボール協会が結成された。こうした流れを主導したのは、当時、横浜市体育係長であった青木近衛。彼は東京五輪の際にバレーボール第二会場の誘致運動を主導する人物である。又木は当初協会の代表理事をつ

とめていたが、一九五〇年三月の定期総会で初代理事長に選出された。

横浜バレーボール協会は、毎年の市民バレーボール大会に加え、第四回国民体育大会(一九四九年)、第二回五大都市体育大会(一九五二年)、香港チームとの国際親善大会(一九五三年)などを成功させていった。

当時日本バレーボール協会は「一〇〇万人バレー」を目標に掲げていたが、横浜・神奈川のバレー人口も、こうした大会を経て次第に増えていった。

### 東京オリンピックの開催

一九六三(昭和三八)年八月、東京オリンピックのバレーボール第二会場が横浜文化体育館に決まると、横浜・神奈川のバレーボール協会は、大会準備と実施に奔走することとなった。

又木誠八郎は施設部副部長として、横浜会場の設備全般を担当した。準備期間中は毎週二回の東京での打合せ、参加チームの練習会場・日程調整・輸送の手に加え、大会期間中は練習会場・本会場の双方で設営・用品の運搬などに当たった。彼は後年、次のように当時を振り返っている。

バレーボールがオリンピックの正式種目に採用されたのは東京大会からである。そのため参考になる文献がない。文字通り無から有を生むことばかり―衆知を集めての企画で、本務の傍らそれに専念するために帰宅が深夜におよぶこと

が屢々で、当時はまたそれが至極当然という風潮がみなぎっていた。みんな世紀のオリンピック大会開催とばかり、失敗は到底許される筈もないので気迫十分な緊張の日であった。東京オリンピック開催は私にとって創造性を高め、企画力を磨き組織的運営に自信を与えてくれた尊い体験であった。

(『神奈川県バレーボール協会五十年史』八一頁〜八二頁)



東京オリンピックの際の横浜文化体育館の施設担当職員 前列右から6人目が又木。

東京オリンピックのバレー競技は、一九六四年一〇月一二日から二三日にかけて開催された。横浜文化体育館では男女合計二二試合が行われ、三三〇

〇〇人の観客を集めた。最終日の日本—オランダ戦は三位決定戦で、日本男子が銅メダルを獲得した。また同じ日、女子もソ連に勝って金メダルを獲得（駒沢体育館）、以後バレーボール人気は全国に広まっていった。

### 神奈川県バレーボール協会へ

又木誠八郎は、一九六六（昭和四一）年四月神奈川県バレーボール協会の理事長に就任した。県協会は、横浜・川崎・横須賀・藤沢・小田原・県央・平塚の七つの地区協会（一九七七年から相模原が加わる）と、実業団・高体連・中体連・大学などの友好団体とを束ねていた。実業団では日本鋼管、高体連では藤沢高校が全国大会で優勝を重ねるなど、極めて高い水準を誇っていた。又木は、「理論的な根拠に立脚した、すじを通す強い性格と、繊細な感覚とをもち、その実行力」（『神奈川県バレーボール協会五十年史』二四頁）をもって、水を得た魚の如く、組織の拡充に邁進することとなる。

最初の仕事は、日本リーグ（現在のVリーグ）の開催であった。日本バレーボール協会では、レベルの向上と底辺の拡大を狙って、一九六七年に日本リーグを発足させた。神奈川県からは日本鋼管と富士フイルムが選ばれ、横浜文化体育館・川崎市体育館・平塚見附台体育館の三ヶ所で開催されることとなった。

理事長に就任したばかりの又木は、

リーグ開催の実行委員長として、県下の地区協会と協力しながら準備を進めた。最大の問題は観客動員数と会場設営の問題であった。深夜に車に分乗してひそかに電柱にポスターを貼ったり、トラックを自前で借りてきて二千人以上の椅子を運び込んだり、苦勞が絶えなかったようである。又木は、穴を空けたベニヤ板にポスターを貼って針金で結びつける方法を指南するなど、役員たちを鼓舞しながら、大会を成功へと導いた。この経験が、地区協会の運営能力を磨き、県協会の組織強化にもつながる結果となった。

### 友好団体と家庭婦人バレーボール連盟

又木誠八郎は、横浜第二高等学校（翠嵐高校）を率いて国体で準優勝した経験（一九四九年）を持ち、神奈川県のみならず、関東・全国の高体連の専門部長をつとめるなど、高校バレーの技術指導・強化に終始つとめた。しかしそれ以上に、彼が心を砕いていたのは、バレーボール人口の拡大であった。

又木によれば、昭和三〇年代までは「金持ちのスポーツ」「好きでやってた時代」であり、東京オリンピックでようやく「見るバレーボール」が定着してきた。しかし昭和四〇年代はさらに「レクリエーションバレー」の普及を図ることが必要である。そのためには、地区協会の充実に加えて、県協会の友好団体の拡充が急務である。つまり、地区協会と友好団体のマトリクスによ

って組織強化と普及拡大を図ることが、彼の理想とする組織像であった。

そこで新たに、家庭婦人バレーボール連盟（後述）、クラブバレーボール連盟（一九七五年）、小学生バレーボール連盟（同年）を発足させた。これらの友好団体は、一九六六（昭和四一）年から毎年開催されていた県選抜優勝大会に参加し、各種別の選考競技会で技術を競い、交流を深めることとなった。また一九七三年にはバレーボール神奈川県友の会を誕生させ、バレーボール愛好者の組織化・定着化を図ろうとした。なかでも最も力を入れたのが、家庭婦人バレーボール連盟の組織である。

東京オリンピック以後、各自自治体では、婦人の健康促進と相互交流を目的として「ママさんバレー」を奨励しており、一九七〇年時点で県下に二千を超えるチームがあるとされていた。これらの団体を組織化すべく、一九六九年一月に結成されたのが神奈川県家庭婦人バレーボール連盟である。

同連盟は、春と秋に競技会を開催するなど、活動を続けたが、加盟団体は目標の二百チームに届かず、組織化は進まなかった。同連盟の顧問であった又木は、地区連盟を創設することを勧めたが、思うように進展しなかった。そうしたなか、一つの転機となったのが一九七六年の「山ゆり杯」である。このイベントは、神奈川県新聞社・テレビ神奈川と県協会が主催した競技会で、婦人バレーボールを初めてマスコミが

大きく取り上げるといって注目が集まった。二七七チームが参加し、県内八ブロックに分れて三ヶ月にわたる予選会が行われた後、各地区代表によるトーナメント方式で優勝杯を争った。この翌年、県家庭婦人バレーボール連盟は改組し、県下に九地区連盟が置かれることとなり、又木は副会長の座に座った。第二回目の山ゆり杯からは、家庭婦人バレーボール連盟も共催に加わり、以後九ブロックで予選が実施されるようになった。また第九回（一九八四年）からは小田急も加わり、参加チームも急増の一途をたどった。

### 国際親善と環太平洋ジュニア選手権

又木誠八郎は、一九六六（昭和四一）年以降、主たる活躍の舞台を県協会に置いたものの、横浜協会でも副理事長をつとめていた。東京オリンピックの開催で運営実績を積んだ横浜バレーボール協会は、横浜文化体育館を拠点に、中国・ソ連などとの親善大会を毎年のように開催するようになった。

こうした横浜協会の活動は、当時飛鳥田一雄市長が進めていた「都市外交」の一翼を担っていた。一九六八年九月、飛鳥田市長のオデッサ（旧ソ連、横浜の姉妹都市）訪問に際して、又木は副団長総務として横浜選抜チームを率いて同行した。翌年、今度はオデッサチームが来浜した際には、文化体育館で四日間にわたり親善試合が開催されたが、又木は大会副本部長として、競技

全般を取り仕切った。このほか、中国上海市との婦人バレーボール交歓会（一九七五年六月）や、高校選抜チームの友好代表団派遣（一九七六年八月）なども行われた。



上海市との婦人バレーボール交歓会（広報課写真資料）

こうして海外へと広がりをもせていった又木誠八郎の活動は、環太平洋ジュニアバレーボール選手権大会へと結実した。この大会は、アメリカのハワイ州・カナダの呼びかけで、ジュニア世代の強化を目的として、一九七四年に始まったもので、アメリカ・カナダ・中国・韓国・台湾・オーストラリア・ニュージーランドなどが参加して、毎年行われた。又木は第一回以降、日本

側担当者として運営に携わり、高校生をはじめとする若い世代に対して、世界の実力を体感し、国際感覚を育む場を提供し続けた。横浜では、一九八二年八月に第九回大会が開催され、又木は実行委員長をつとめた。

### ビーチバレーの興隆

又木誠八郎の最後の活躍の舞台は、ビーチバレーであった。彼は、かねてよりバレーボールのインナー化に強い疑問を抱いていた。

東京オリンピックを境にそれ以降の日本リーグ等は全て屋内で行ったと思う。私は一般の大会の屋内には不賛成だった。なぜなら、オープンコートの方が健康的だということ、皆が屋内に入り始めたころ藤沢高校はオープンコートで練習していた国体で優勝したという根拠があったからだ（『横浜バレーボール協会五十年史』一五〇頁）

オープンコートの方が身体の順応性と機敏性が鍛えられ、選手や役員の交流促進にも繋がる、と又木は確信した。

おりしも一九八七（昭和六二）年ビーチバレーの世界選手権第一回大会がブラジルのリオデジャネイロのイパネマ海岸で行われた。日本を含む七ヶ国、二四チームが参加し、好評を博した。以後その親しみやすさ、面白さから、急速に世界中に広がっていった。

世界選手権が開催された年の八月、

藤沢市の湘南江の島海岸で第一回ビーチバレージャパンが開かれた。三日間で二万七千人を集め、ファン投票によるペアの川合・熊田組が優勝した。又木は実行委員会委員長をつとめた。

この翌年（一九八八年）、日本バレーボール協会の傘下に日本ビーチバレー連盟が設立された。ビーチバレーの人氣は瞬く間に全国に広がり、各地で地方大会が行われるようになった。第二回大会（一九八八年）は、全国九ブロック代表が参加し、予選グループ戦、決勝トーナメント戦と、規模も拡大して行われた。

一九八九（平成元）年八月には、横浜市政百周年、横浜開港百三十周年祭にあわせて、金沢海の公園ビーチで、YOKOHAMAビーチバレー89が開かれた。大会のコンセプトは、国際色豊かな「観るビーチバレー」と、一般市民が参加する「行うビーチバレー」のミックスであった。すなわちアメリカ・ブラジルなど海外のトップスターを招いて日本チームとの対抗戦を行う一方、市内の小中高・一般など六八三チームによるトーナメント戦が同時に開催された。会場となった金沢海の公園ビーチには、二一面のコートと五千人を収容するスタンドが準備され、三日間で一一〇〇〇人を集めた。文字通り日本最大級のビーチバレーのイベントであった。

さらに翌年八月には、横浜の姉妹都市であるサンディエゴ・ボンベイ（ム

ンバイ）・バンクーバー・上海・マニラに加えて、オーストラリア・ブラジルから選手を招いて、YOKOHAMAビーチバレー90が開催された。

ビーチバレーは、又木が追求し続けたバレーボールのあらゆる要素が凝縮された競技であり、彼の長年の企画力・組織力・実行力が結集した総決算とも言えるべき事業であった。横浜のビーチバレーは現在も続けられている。

又木誠八郎は、二〇一一年二月二十五日、約七〇年間にわたってバレーボールに捧げた人生を静かに閉じた。享年八七歳。

### 付記

横浜市史資料室では、現在、又木誠八郎の関係資料を整理中です。なお末尾になりましたが、貴重な資料をご寄贈頂きました又木トシ様、またご仲介頂きました藤沢市文書館館長の中島淳一様、同館史料専門員の澤内一晃様に、心からお礼申し上げます。

参考文献 『日本バレーボール協会五十年史』（日本バレーボール協会、一九八二年）／『神奈川県バレーボール協会五十年史』（神奈川県バレーボール協会、一九八四年）／『横浜バレーボール協会五十年史』（横浜バレーボール協会、一九九九年）／『オリンピック東京大会 バレーボール競技報告書』（日本バレーボール協会、一九六六年）／『白い軌跡』（神奈川県家庭婦人バレーボール連盟、一九九六年）／又木誠八郎「砂浜のレクリエーション」『ビーチバレー・ジャパン』を顧みて（『河川』六三―一〇、一九八八年）

（松本洋幸）